スポーツクラブが運営する学童保育の現状
－Ａスポーツクラブを例にして－

Current status of after-school care for children sports club operated
- As an example the A sports club-

1K10C373-9　古川 まどか
主査 木村　和彦 先生　　副査 作野　誠一 先生

【目的】

現在、我が国の保育事業は大きな転換期を迎えていると言える。経済事情や女性の社会進出による共働き世帯の増加、またひとり親世帯の増加などの理由から．子どもが放課後に一人で過ごさなければならない時間ができている。そのような状況がうまれている一方で、厚生労働省（2013）によると待機児童は前年より 1168 人増加し 8689 人となっている。また市町村などの公立が直接運営する学童保育が減少してきているのが現状である。そして保護者が学童保育に質の高い内容を求める時代になってきた。そのような背景があるなかで、いくつかの民間企業も自社の強みを活かし学童保育事業への参入を試みている。この流れにのり、スポーツクラブもこれまで行ってきたキッズプログラムと学童保育事業をかけあわせることで保護者が求める質の高い保育サービスを提供していけるのではないかと考えた。本研究では保護者がスポーツクラブ型の学童保育でスポーツや習い事を受講できるという点に魅力を感じて入所させていると仮定した。Ａスポーツクラブを例にしてスポーツクラブが運営する学童保育の現状を知る有益な資料となることを目的としている。

【方法】

神奈川県を中心に展開されているＡスポーツクラブの担当者及び保護者 35 名に対して郵送法を用いた質問紙調査を行った。クラブの担当者へはクラブのねらいや現状の課題、課題への対処法などについての質問を行った。保護者に対する調査では小杉・木村（1999）の先行研究を参考に基本情報、学童保育の利用目的、施設選択の際の重視条件、良いと思う点、不満な点などについて質問を行った。また、分析はＳＰＳＳを用い、回答の単純集計を行った。

【結果】

本調査で得られた回答は 15 名であり、回収率は 42.9%であった。Ａスポーツクラブが学童保育をはじめたきっかけは働く女性（保護者）のサポートであるとのことだった。保護者も仕事を続行するために子どもを学童保育へ預けているというものが 30.0%となっており、クラブ側の意図と保護者のニーズが一致していることがわかった。また保護者の 46.7%は常勤であり、帰宅時間が 18 時から 19 時であった。そのような状況から子どもの身の安全を心配し入所させている保護者が多かった。施設選択条件では運動プログラムがある、習い事をさせてくれるという項目を重視すると回答した保護者がそれぞれ 73.3%、86.7%であった。良いと思う点では運動プログラムを受講できるが 13.3%、習い事を受講できる 8.9%、不満な点では受講したい運動プログラムがない 3.4%、受講したい習い事がない 17.2%といずれにおいても一定の評価基準となっていたが、託児的な役割や集団生活を経験でき子どもの成長発達によいという点がより重視されていた。また、現在はプログラムを追加し受講している児童は半数に満たなかったが、受講していない児童の保護者のうち 75.0%は何かしらの種目を受講させたいと考えており、運動プログラムや習い事へのニーズもうかがえた。また保護者の現在の運動頻度は約７割が月１回以下のペースであるが、過去に運動経験を持つ者が多かった。辰本・宇蕙・三村（2007）の研究にあるように運動中止型に当てはまる保護者が多いため、運動に関する意識が高いと考えられる。

【考察】

保護者は自身が仕事を続行するために、子どもが一人になってしまうという状況を案じている。そのため、学童保育を利用するという選択をしている。その際に、ただ子どもを預けるだけではなく、運動プログラムや習い事を受講させたいと考えている。ただし、保護者は第一に子どもの安全を考えており、託児的な役割がきちんと果たされているかを最も重視していた。また、年齢の異なる子どもと触れ合える機会であることから、子どもの成長や発達によいと考えて入所させている者も多くみられた。このように一般の施設と同程度の基準を満たしているという前提がある上で、保護者は学童保育にプラスの価値を見出したいと考えているということがわかる。